

カモシカ対策 ヒノキ大苗植栽試験について

中津川営林署 岩村担当区基幹作業職員 ○上 田 尉 夫
〃 (株)岡 田 武 司

はじめに

中津川営林署におけるニホンカモシカの被害は、昭和47年に食害が確認されて以来、継続して発生している現状にある。

昭和53年度から猟銃による捕獲実施以降、減少傾向にあるものの、捕獲頭数の制限等から、被害の著しい減少には至っていない。

これまで、忌避剤・防護ネット・防護柵などによる防除対策を講じてきたが、画期的な対策となっていない。

このような経緯を踏まえ、今回カモシカの食害防止を目的とした大苗植栽の試験地を設定したので報告する。

1. 被害状況

(1) 食害箇所

カモシカ被害は、ヒノキ幼齢人工林の中でも風が弱い日だまりで、かつ、付近に崩壊地・岩石地・森林など逃避場所があるところに多く見受けられる。

(2) 被害数量

被害と損害の面積累計は図-1のとおりで、昭和47年から、平成元年12月までの18年間に、被害区域面積は約700ha、過去5年の損害は面積で約19ha、金額約4,000万円に達している。

(3) 防除対策

防除対策は図-2のとおりで、昭和50年から忌避剤塗布、昭和53年からネット被覆等を効果的に実行している。

2. 試験地の設定

(1) 大苗の条件と確保

被害は100cm以下の幼齢木に多いため、カモシカがとどかない150cm程度の大苗を植え

ることとした。

大苗は、阿岳事業所跡に昭和57年に山引に仮植し、過密状態となっていた苗木を利用した。

(2) 試験地の条件

大苗は普通苗に比べ運搬、植栽等で掛かり増しとなるため、カモシカ被害が顕著なところで、かつ、運搬に便利な林道沿いを選定することとした。

(3) 試験地の概要

試験地は上記の条件を満たす阿木恵那国有林44ら林小班とした。この林小班は図-3のとおりで、林道沿いで南向きの日当りのよい緩傾斜地である。標高は、1,230mで最寄りの集落から7kmの位置にある。

大正9年植栽の人工林ヒノキを昭和61年度に1.44ha伐採し、昭和62年度春ヒノキをha当り3,000本植栽した2代目造林地である。

植栽と同時にカモシカ被害を受け、以降継続的に食害を受けているため、ヒノキ造林木は“ウチワ”状をしめし、上長成長はほとんどみられない。

下層植生はチマキザサ90%・灌木10%で、食害区域の中でも特に被害が著しい0.27haにヒノキ大苗を600本植栽した。

3. 大苗植栽の状況

(1) 大苗の形状

大苗の形状は、平均苗高158.0cm、根元径12.7mm、枝張り54.0cmの苗を使用した。

(2) 大苗植栽の工期

大苗植栽の工期は大苗掘取り1.25人、植付け9.75人(支柱立て含む)、総人工11人となった。ha当りに換算すると40人を要することになる。

4. 工期等比較

植栽木が大きいことから、下刈を2回程度実行すれば充分成林が期待できると想定してha当たりの工期を比較したのが表-1である。

総人工は大苗43.9人、普通苗45.5人となり、この比較からはあまり大差が無い結果となっている。

5. 今後の課題

植栽する苗木が大きいことから

- ① 運搬及び植え付け人工の掛かり増しが多い。

② 植栽可能区域が限定される。

③ 大苗の調達が難しい。

など、今後の検討課題は多くある。

周辺の造林木にはカモシカの食害は約100cmまでしか見受けられないことから、大苗の上部食害の可能性はかなり低いと考えられる。また、大苗を植栽することにより下刈を数回減らすことができれば、真夏の炎天下での肉体的疲労が軽減されるものと思われる。

おわりに

カモシカ防除対策として実施してきた、忌避剤・防護ネット・防護柵等はそれなりに効果はあるが、いずれも守りの対策であった。

カモシカと林業の共存をはかるためには、カモシカがとどかないような大苗を植えるという攻めの対策が今後必要と考える。

また、真夏の炎天下での下刈作業を減らすためにも効果的な試みであると考ええる。

現段階では試験地を設定したばかりだが、今後の調査で、逐次成果が明らかになるものと考えられる。

図-1 カモシカ被害・損害面積累計（単位：ha）

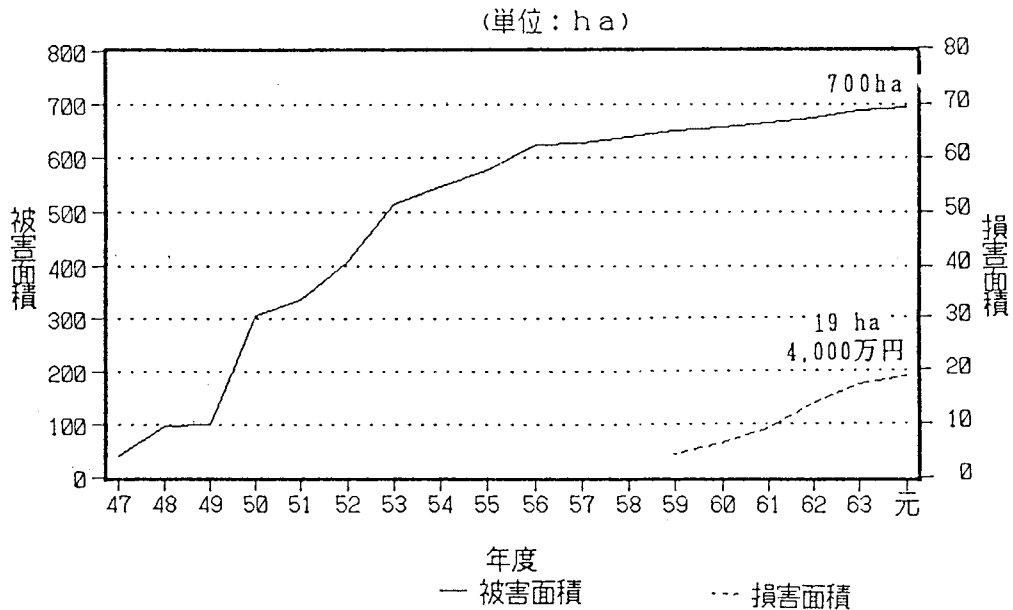


図-2 カモシカ防除実績 (ha)

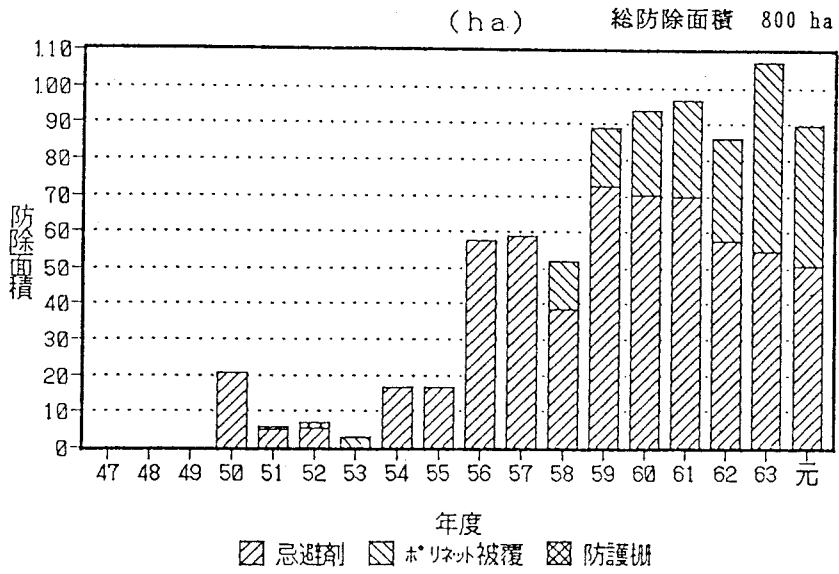


図-3 阿木恵那国有林44ら林小班

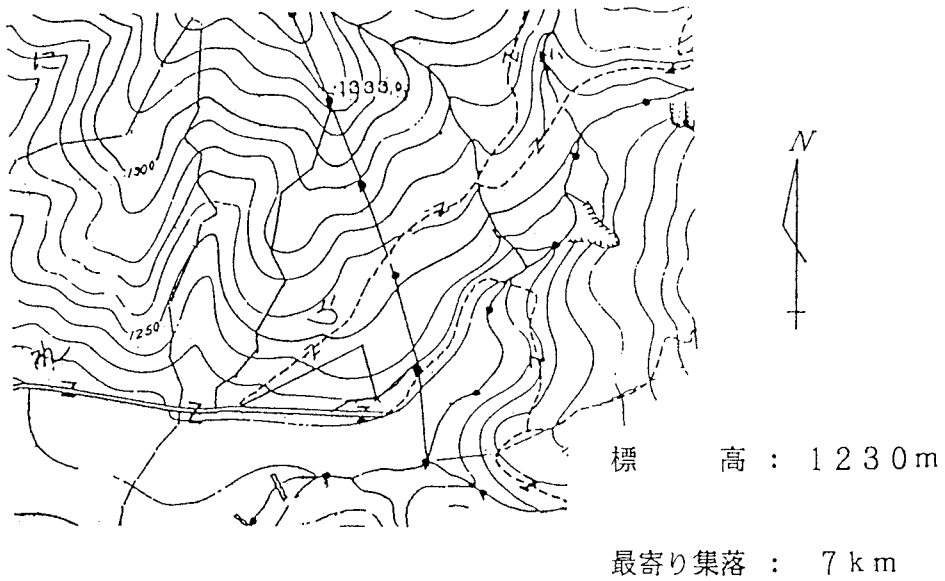


表-1 ha当たりの功程比較

	大 苗	普通苗
植 付	36.1 ^く	13.6 ^く
下 刈	7.8 ^{2回}	23.4 ^{6回}
カモシカ防除	—	8.5 ^{5回}
計	43.9	45.5